山崎郷土報

NO. 46

50.11.1

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩（七）

島田　清

二、池田輝澄時代　（続六）

前号に掲げた「寓簡」の行文はギゴチなく、説明も委曲を尽くしていない。しかし、内容は、「伊賀越道中双六」で全国に喧伝された伊賀上野、鍵屋の辻における河合又五郎討取事件と、池田忠雄の後嗣決定事件である。前者については、既に概要を説明したが、主として、荒木又右衛門が渡辺数馬を助けて河合又五郎とその一行を討ち取ったことを重点に述べたため、その背後の事情には、なお、不充分なところがある。「寓簡」には、この点について、簡単ながら重要な事実を記しているので、今少し掘り下げてみよう。

池田忠雄が、寵臣渡辺靱負の二男、源太夫を殺害して逐電した河合又五郎を捕えるため、その父河合半左衛門を捕えた措置は、普通、一般に見られるケースといってよい。また、又五郎が、旗本の安藤治右衛門にかくまわれたことを知った忠雄が、久世三四郎・阿部四郎五郎の両旗本を介して引渡を要求したことも当然であるところが、安藤は、この要求を拒絶した。まことに理不尽な話だ。しかし、「窮鳥ふところに入れば……」という諺もあるから、忠雄は一歩を譲り、久世・阿部が提議した又五郎・半左衛門交換措置に応じた。しかし、実際は、三人が忠雄を欺き、半左衛門をも奪い取ろうとした策略であり、忠雄は、まんまとそれにひっかかったことになった。わかったときはもうおそい。又五郎と半左衛門は三人の手中におさまり、忠雄との間には厚い壁が張られていた。忠雄は地駄んだふんで口惜しがった。東照神君

目次

近世初頭の山崎藩(七)……島田　清　一
コウ寺の源平狸……福井託二　六
郷土研究会見学旅行同行記……松原　磐　七
続池田恒元家中人数帳(二)……九
郷土だより……十二

の外孫という毛皮のよさが示すように、坊ちゃん育ちで、善良な紳士の忠雄は、資性、正直、かつ、律義であった。旗本三人男のように、権謀術策をめぐらし、時には、暴力をも辞さない、という種族とは全く違っていた。忠雄の激怒がどんなにひどく、大きかったかは、想像するにあまりがあろう。

一方、旗本衆の方にも、こうしたたくらみをめぐらし、大名達に敵対しようとする風潮の生れる事情はあった。戦国時代は「槍一筋の家柄」という言葉が使われるように、武功によって一国一城の主となったものも少なくない。しかし、元和偃武以後は事情がかわった。もう戦争はない。そうすると、思わぬ出世は望めず、元和初頭の身分がそのまま固定してしまう。この時点で大名になっているものはよいが、大名になれなかったもの――すなわち旗本――は浮かばれない。いかに腕があろうと使うすべがないからだ。そして、世の中が泰平になると、身分と格式がいやに厳しくなり、両者の格差は明瞭な形で示される。旗本衆の中に、時勢への反発者を出したのも、また、已むを得まい。河合又五郎が渡辺源太夫殺害後、江戸に逃げて彼等のふところに飛びこんだのは、もとより彼等との縁故によるものであるが、これが、はしなくも、旗本対大名の不隠な対立に激発の導火線を与えることとなったのは、皮肉な運命といわねばならぬ。

書道用品
結納用品
志水成文堂
山崎町さつき通り一丁目
電話 ②〇五四七・四三〇五

安藤・久世・阿部の三人は、相手が東照神君の外孫であるところに無上の痛快さを覚えたのであろう。一方、喧嘩を売られた忠雄も、そのままでは引き退がれない。自分の方には何の非もないのだから、飽くまで所期の目的を貫徹するまでだ。中間にあって困るのは、これに適切な解決を与えねばならぬ老中（幕閣）である。問題は大きくエスカレートし、全天下の耳目を聳動するまでに発展した。

事件の起こった寛永七年（一六三〇）当時、老中の職にあったのは酒井忠世・内藤忠重・土井利勝・青山幸成・青山忠俊・稲葉正勝・森川重俊・酒井忠行であった。しかし、寛永九年になると、正月に森川重俊が罷め、永井尚政が代った。忠雄が急逝したのはこれより三ヵ月後の四月であり、十一月になると松平信綱・酒井忠勝も老中に加わった。これらの諸侯は、いずれも譜代大名中の錚々たる人物で、激動期をうまく乗り切り、徳川幕府三

百年の基礎を確立したが、正直なところ、池田家のこの事件には困惑を感じていた。旗本三人男の背後には八萬騎がある。神君の孫で、理に合ったことを申し出てきたといっても、大名対旗本の対立、抗争がはげしくなった現在、一片の裁定書で片付くものではない。取扱如何によっては天下の騒擾をも招く。老中の最もおそれたのはこのことだ。そこで、異例の〝御三家諮問〟という形で処理の仕事が進められた。紀伊家の頼宣、尾張家の義直、水戸家の頼房は、このとき、いずれも健在であった。前将軍秀忠からは実弟、現将軍家光からは叔父である。また、忠雄の生母督姫にとっても実弟であったから、忠雄にはもちろん叔父だ。これらの人達が、徳川家ならびに池田忠雄の立場に深い配慮を加えてくれるのは当然であろう。

また、忠雄の室は阿波国主蜂須賀至鎮の女であったし、長姉は宮津城主京極高広の室、次の振姫は仙台の伊達忠宗の室であった。幕府は、こうした一門の諸侯とも協議し、

〝河合半左衛門を池田家へ引渡し、旗本の安藤治右衛門とこれを助けた久世・阿部の二人を寺入りさせる。〟

という案を忠雄に提示した。しかし、忠雄にとってみれば、この案は、河合半左衛門をだまし取られる以前の段階に戻すだけで、第一段階の河合又五郎受取にまで及ぶものではない。どうして満足することができよう。「河合又五郎を捕える」――単純ながら、最も本質的なこの目的からは程遠い。忠雄がこの案を蹴って、飽くまで又五郎引渡しを要求したのは当然である。

閣老たちは、こうした忠雄の心境や要求の合理性を認めていなかったわけではない。しかし、一方、旗本たちの敵対意識をことさら刺戟する処置は、この際、どうしても避けたかったのであろう。まことに煮えきらぬ処置であるが、保守的な為政者が、いつの時代でもとる立場は、まず、こうしたものであった。

ところが、寛永九年春になって、思いがけぬ事件が起きた。それは、江戸市中に流行していた疱瘡に忠雄が感染し、四月七日に急逝したことである。（現在は、種痘

食料品一切卸問屋
㊂ 寺田商店
山崎町紺屋町 電②〇〇〇五

のおかげで、疱瘡で死ぬものはほとんどないが、明治以前には、これで死んだものが相当ある。忠雄の兄忠継、母督姫が、元和元年、前後して急死したのもこの疱瘡のためである。）寛永七年七月二十一日の事件発生以来、既に一年十ヵ月を経過し、幕閣内に焦慮の風があった時だけに、閣老たちは、ホッと胸をなでおろしたにちがいない。

一方、池田家では、忠雄の急死によって、二つの大きな問題に逢着した。一つは、遺言にあるごとく、河合又五郎の首を墓前に供えることである。「この家がつぶれようとも、又五郎の首は必らず墓前に供えよ」というきびしい遺言である。藩士たるもの、一命を捨ててもこの仕事に邁進せねばならぬ。しかし、相手は、旗本八萬騎の中にかくれ、容易に捕えることができぬ。どのような手段によってこれを討ち取るか、行く手はなかなかけわしい。

今ひとつの問題は後嗣のことである。忠雄在世当時は全く意識に上らぬことであったが、急逝されると、忽ち、当面の重要問題となった。後嗣がなければお家は断絶。後嗣があっても幼少であれば減禄、移封。――これは、幕府がとって来た最も通常の処置である。現に、池田家でも、元和元年（一六一五）、忠継が急逝し、後嗣がなかったので問題となったが、この時は、淡路六万石を領

山崎中央商店街
堀口写真館
結婚式場 楠風閣
農協会館出張

していた弟忠雄を引き戻し、後嗣とすることができた。また、元和二年に利隆が逝去したときは嫡子光政に相続を許されたが、八歳であったため、翌年、一〇万石を減じ、三十二万石として姫路より鳥取へ所替させられている。忠雄の場合は、後嗣勝五郎がまだ三歳にしかなっていない。家中上下が深い憂色に包まれたのも無理はない。しがない世間の雀どもは、今に池田家も減禄、移封の命を受けるだろうと、ざわめき立ててしようがない。

「寓簡」を見ると、

〃忠雄家督ノコト、勝五郎幼稚ニ依テ、弟石見守ニ御預ケ、後見可仕コトヲ被仰付。〃

とあって、幕府は、輝澄に家をあずけ、勝五郎成人まで後見させる、という方策で臨んだらしい。一軒の家でも、こうしたことが家庭争議のもととなることはよく見受け

る。大名家でも同様である。両方の家来が対立、反目し、お家の騒動に発展した例は珍らしくない。池田家の後に入ってきた本多家についてみても、忠政の弟忠朝が大阪夏の陣で討死したあと、子の政勝が二歳であったため、忠政の二男政朝が後嗣となって遺領の五万石を領し、政勝を保育した。そして、寛永八年（一六三一）忠政が卒し、政朝が姫路城一五万石を相続したとき、忠朝遺領のうち四万石を政勝に継がせ、ともに姫路城に居た。寛永一五年（一六三八）、政朝は三九の壮歳で没するに当り、実子政長・政信の兄弟がまだ幼少であったため、政朝は従兄弟政勝に姫路城一五万石を継がせ、政長成人ののち、家督をつがせるよう遺命した。

政勝は、翌寛永一六年、大和郡山城一五万石に移され、政長・政信兄弟もともに移ったが、二人が成長し、中務大輔、監物となっても政勝は遺領をかえそうとせず、自らの長男勝行が卒してから三年目の承応二年（一六五三）僅かに勝行の遺領を分けて政長に三万石、政信に一万石を与えた。しかも、寛文二年（一六六二）、政信が二九才で没すると、自らの三男忠英にあとを継がせ（後年、山崎藩主として入ってきた本多肥後守は、すなわちこの忠英である）、寛文一一年（一六七一）五八才で没したときにも、政朝の遺領をことごとくは返さず、そのうちの九万石を政信に与え、先知と合せて一二万石とし、残り六万石は次男政利に与えた。この政利は、のち、播州明石の城主となったが、政道おさまらず、天和二年（一六八二）城地を没収されている。何だか、暗い運命を背負った感がする。

一方、本多政信は、このような経過ののち、ようやく、郡山城一二万石の城主になったけれども、藩内に残された政朝系家臣と政勝系家臣の軋轢、抗争が絶えず、長く政治の不振が続いた。

山崎藩主の池田輝澄が、壮年の身でありながらこうしたことに毅然とした見識をもち、幕府の処置に異議を申し立て、僅か三歳の勝五郎に本領安堵の御墨付をもらったのは、それだけの器量をみとめるべきであろう。

和洋酒食料品販売
八百福商店
山崎町山田 TEL②〇四一三

コウ寺の源平狸

福井託二

昔奈良朝の終り頃播磨の千本屋庄界（千本廃寺の寺田地に隣接して庄官の管理田地がありその境界の名称ならんか）にコウ寺と云いふらわした寺がありました。またその東方一粁足らずの地点国道二十九号山崎大橋の手前を少し右へ入った処にヤ寺と云う寺もありました。昔から土地の人々は両方合せてヤ寺コウ寺の何んとかと云われた諺も残っている程で春秋の願日には両寺とも接待ごとが催され賑やかであったそうです。後の世のことコウ寺くに儀平太と儀平と申す父子の百姓が住んでいて仏心厚く儀平は人もうらやむ親孝行者でした。ところが儀平太はかりそめの病が元で看護の甲斐もなく死んでしまいました。近所の人達も、悲しみのうちに葬式をしましたその際わざわざコウ寺の院主か何かと野辺の送りに親身になって面倒を見読経して会向されました。後になって院主はこの葬には一足も外に出た覚へはないことが分ってでは誰だろうその奇特な人はとみんな不思議がりました。いろいろ調べますとこれはコウ寺に年久しく住む狸の仕業と判明しました。驚いたり有難がって村人がお礼に狸の焼ものを造ってコウ寺源平狸と名付けて祠ったそうです。

そのいわれを受けついで千本屋の今は亡くなられた西川雅一さんが十糎ほどの狸の焼ものをこさえ来歴を印刷した紙を狸の腹の中に入れ希望する人にあたえたそうであります。先日それを下広瀬の友人に見せて頂きました。然しその源平狸のいわれが解りません。もしかすると昔源平合戦にコウ寺の狸もの語りが因縁があるのではと私なりに解釈していますが西川さんのお考えはどうだったのでしょう。気まぐれな遇発着想で名づけられたとは思えません。それからコウ寺は室町時代に光明寺と名乗った事があると古文書を元に西川了諦さんが話しておられました。コウ寺の遺跡は今もそれらしい十米四方の石垣壇上に小堂が建っています。以前二三回掘り探しましたが十二三枚各様式の違った布目瓦が地表下五十糎程から出土しましたのと石造の唐獅子像二十糎大が一箇石垣の

新才会ピアノ教室
山崎町庄能一一九ノ一一
電話 ② 三六八六

間から出ました。今山崎町郷土館にそれを陳列しています。また左方庄界地区の急坂を緩るくする際寺跡地の端を削り取って道路用に埋めたてた際沢山の古瓦類が出たそうです。大正の初め頃の事で、当時使役人夫に出た古老の話であります。誰も古瓦には興味のない時分だったので惜しいことだったと今思います。学術上貴重な古瓦類もあったのにと今さら残念に思います。ヤ寺の方は一度だけ小堂あたりを探しましたが瓦の一欠けも見つかりません。だとするとこのヤ寺は小規模の藁葺き（か茅葺き）であったのでしょう。コウ寺は昔からお薬師さんと呼んでいる位で本尊は薬師如来でしょうがヤ寺コウ寺とも本来はどの字を使ったかコウ寺は先づ国府寺をもぢったものと思われるが一国一寺の国分寺形式がこの播磨に二つもある筈はなく勿論ヤ寺はどの字を当てるか全然分りません。現在は何も古文書類は残っておりませんので今後の研究に俟つより外ありません。

郷土研究会見学旅行同行記

松原　磐

今年の旅行は山崎町と特に関係の深い隣の岡山県旧備前藩池田侯の史跡を見学する事としました。五月二十五日午前八時に山崎町神姫バスを出発、バス一台、会員五十名の参加者で竜野ー上郡を経て県境に近い和気郡永谷村延原の閑谷学級を訪れました。

閑谷学級は一六六六年（寛文六年）、今より三百十有余年前、藩主池田光政侯が一般農民子弟の中より優秀なる生徒を集めて教育した農民学校である。学校案内者より懇切なる説明を一時間にわたり承った。

当時の徳川幕府の統治の方針として、農民には『おごらせず、死なせず、多く作らせて絞り取れ』の徹底した詐取政策をとっていたのである。農民の汗して作りあげたお米を主財源として権勢をほしいままにしていた。時の幕府及び藩主大名はその尊い農民を人間としての扱いをしていなかった。その頃、名君として誉れ高い池田光政侯は孔子の教えを学び藩学校とは別に百姓学校を進んで創設し、その後数多くの人材を育成したのである。他にその例を見ない庶民の教育の為に藩財政を投じて造っ

た一大教育道場である。三百年に余る長い年月を経た今日未だ微動だにしていない建物、石垣、広場、実に立派なものである。光政侯が教えを受けた孔子校内に孔子廟を祀り、自らは三尺下って師の影を踏まない一段と低く小さな社を建てられている業、ほんとに頭の下がる思いで感激しました。（願わくば山崎町の方々も、一人でも多く此の教育道場を見学されたいものと推奨します。）

次は備前焼で名高い伊部焼きの釜元を訪れ鑑賞する事とした。

此処の焼物は一切薬を用いず、絵つけもせず長時間焼きしめて作りあげた歴史の古い名器の産地である。

見学を終え、それぞれ記念の買物を済ませ、昼前、岡山市の中心部、天下の名園後楽園に到着、総面積十三万四千平方米に及ぶ池泉回遊式庭園で自由行動をとり、旭日川を隔てて烏城と呼ばれる岡山城を望み昼食をとり、二時間の教策を楽しみ、午後二時、車は東に向い池田侯の善提寺、曹源寺に参拝した。実に立派なる禅院で見どたえのある寺院で、一同、記念撮影をなし、お寺の裏山にある池田家代々諸侯のお墓に参拝した。

広い墓地に素晴らしい御影石の墓石が何十となく区画し建立されている。礼拝して感じた事は、お墓守りが出来ていない事である。お墓の周辺が草ぼうぼうの此の様は実に残念に思った。現存の子孫池田侯があるのに、（池田牧場主）なぜ放置してあるのか。日本民族は歴史を尊び祖先を敬う心がこの様では遺憾に思われてならなかった。

三月の寒中、裸祭で有名な西大寺観音寺に参拝した。不便な山狭にあるのかと想像していたのに、うってかわった便利な西大寺の中心地に建立された立派な寺院でした。

帰路は相生市を通り、当日はペーロン祭で賑わいのあった後で、赤穂市より有名な七曲り海岸道を走り、素晴らしい海の眺望を満喫しながら、夕日の海に沈む頃、室津港を経て、七時三十分山崎町へ帰着した。

好天に恵れ、全員無事心にしみ入る意義ある見学を終え、心温る幸いなる一日であったと感謝している。

又来る年もよき史跡を選んで、一人でも多くの会員の方々の御参加を得たいものと念願して記を終わります。

和洋酒・食料品
城内商店
山崎町東鹿沢　電②〇三六九

続池田恒元家中人数帳（其二）

会報四十四号掲載の池田氏人数帳の続き、川崎次兵衛の後へ続く者。

一、三十俵四人扶持　中小姓　川村三之丞
一、三十俵三人扶持　同　藤井五左ェ門
一、四十俵五人扶持　同　小川清兵ェ
一、二十四俵三人扶持　同　永田八左ェ門
一、四十俵五人扶持　同　冨井孫兵ェ
一、三十俵四人扶持　同　土肥与左ェ門
一、三十俵四人扶持　同　村川喜太夫
一、三十俵四人扶持　同　下村庄右ェ門
一、三十俵四人扶持　同　長谷川長助
一、三十俵四人扶持　同　坂口小助

和洋酒
食料品卸問屋
三輪又商店
TEL②一一七三

一、三十俵四人扶持　児小姓　野尻半之丞
一、三十俵四人扶持　中小姓　福野甚助
一、三十俵四人扶持　同　藤田小太郎
一、三十俵四人扶持　同　多賀次太夫
一、三十俵四人扶持　同　藤木長九郎
一、五十俵五人扶持　同　篠部権十郎
一、七人扶持　同　日原喜太郎
一、三十俵四人扶持　同　首木善六郎
一、三十俵四人扶持　同　小川半太夫
一、三十俵四人扶持　児小姓　高木七九郎
一、三十俵五人扶持　江戸詰おつう殿お付中小姓　宮部源助
一、三十俵四人扶持　中小姓　完来長五郎
一、三十俵四人扶持　中小姓並茶道　鈴木閑気
一、四十七俵六人扶持　金光清右ェ門
一、四十七俵六人扶持　入沢次太夫
一、五十俵五人扶持　馬中小姓役　景野藤兵ェ
一、五十俵五人扶持　馬中小姓役　鶴沢小左ェ門
一、高五十石　伊賀ノ者　内川重太夫
一、高五十石　伊賀ノ者　村川与一兵ェ
一、高五十石　伊賀ノ者　幸玉十兵ェ
一、高五十石　伊賀ノ者　服部茂左ェ門
一、高五十石　伊賀ノ者　浜田弥市右ェ門
一、高五十石　伊賀ノ者　城助太夫

一、高五十石　伊賀ノ者　服部三太夫
一、高五十石　伊賀ノ者　沖　勘九郎
一、二十五俵四人扶持　間ノ者並料理人　長沢重太夫
一、三十俵四人扶持　間ノ者並勘定ノ者　北角次右ェ門
一、二十八俵三人扶持　間ノ者　苔口孫左ェ門
一、三十俵四人扶持　間ノ者並絵書　松下久左ェ門
一、二十五俵三人扶持　間ノ者　山田庄兵ェ
一、二十二俵三人扶持　同　斉藤長左ェ門
一、二十五俵三人扶持　同　長瀬弥左ェ門
一、二十八俵三人扶持　同　梶浦小兵ェ
一、二十五俵三人扶持　同　冨松伝内
一、二十二俵三人扶持　同　小倉弥市
一、二十二俵三人扶持　同　多賀九之烝
一、二十二俵四人扶持　同　萩田彦助
一、二十六俵三人扶持　同　杉野助九郎
一、三十俵三人扶持　間ノ者並大工　山崎安兵ェ
一、拾俵二人持　山崎与平次
一、二十俵四人扶持　間ノ者　吉岡久助
一、二十俵四人扶持　同　細江茂右ェ門
一、二十俵三人扶持　同　石田喜助
一、拾俵二人扶持　同　渡部与一郎
一、二十二俵三人扶持　同　吉田助七
一、二十俵三人扶持　同　小林六兵ェ

一、二十五俵三人扶持　間ノ者　生田伝右ェ門
一、二十五俵三人扶持　同　福岡又兵ェ
一、二十俵五人扶持　同　伊塚又五郎
一、二十俵三人扶持　同　川崎権六郎
一、二十二俵四人扶持　同　戸田半兵ェ
一、二十俵三人扶持　同　原田平六郎
一、二十四俵三人扶持　同　鈴木八郎右ェ門
一、二十俵三人扶持　同　小川才兵ェ
一、二十俵三人扶持　同　山下孫八郎
一、五人扶持　馬医町屋住　井上吉兵ェ
一、三十俵四人扶持　間ノ者並大工　高原利右ェ門
一、二十俵三人扶持　勘定者　黒田二左ェ門
一、二十俵三人扶持　同　藤村重蔵
一、拾六俵三人扶持　同　川崎加兵ェ
一、拾六俵三人扶持　同　林丈右ェ門
一、二十俵五人扶持　同　今村善右ェ門

一、拾六俵三人扶持　勘定者　水上茂兵ェ
一、二十俵三人扶持　同　谷内三郎右ェ門
一、拾六俵三人扶持　同　水野彦八郎
一、二十俵三人扶持　白救師　正海源助
一、拾俵三人扶持　小児　福田兵太郎
一、二十俵三人扶持　蒔絵師　新免弥太夫
一、八俵三人扶持　勘定者　丸山庄右ェ門
一、拾六俵三人扶持　御居寺　山田九右ェ門
一、二十二俵四人扶持　包下人　河村半右ェ門
一、拾六俵三人扶持　同　種村孫九郎
一、拾表三人扶持　同　金屋四郎介

一、拾表二人扶持　包下人　比地市助
一、拾俵二人扶持　椀方　安田又助
一、拾俵二人扶持　椀方　町野喜助
一、拾俵二人扶持　台所帳付　安井久次郎
一、二十俵三人扶持　舟方頭　古川助右ェ門

一、二十俵三人扶持　おすへ番　小賀甚右ェ門
一、拾俵三人扶持　同　堀田左吉
一、拾俵二人扶持　同　笠田助三
一、拾俵二人扶持　手廻り頭　上田吉六
一、拾俵二人扶持　おすへ番　吉田小太夫
一、拾五俵三人扶持　手廻り頭　進藤宗七
一、八俵二人扶持　おすへ番　小林徳左ェ門
一、五俵二人扶持　小児　氏江太郎助
一、拾弐俵二人扶持　包下人　二宮勘六
一、拾俵二人扶持　おすへ番　作用弥吉
一、拾俵二人扶持　同　上田源四郎
一、拾弐俵二人扶持　掃除坊主　春名円斉
一、拾四俵二人扶持　おすへ番　目黒加左ェ門
一、拾六俵三人扶持　掃除坊主小頭　坂本道情
一、拾七俵三人扶持　掃除坊主小頭　小川長玄
一、拾弐俵二人扶持　掃除坊主　武田清可
一、拾弐俵三人扶持　同　沢田宗林
一、拾六表三人扶持　同　清水長意
一、拾弐俵二人扶持　同　柳生宗也
一、拾弐俵二人扶持　同　奥村仙斉
一、拾弐俵　手廻り頭　岸田勘十郎
一、拾俵二人扶持　掃除坊主　小賀甚可
一、九俵二人扶持　同　比安喜雲

一、九俵二人扶持　掃除坊主　相庭宗竹
一、九俵二人扶持　同　高屋玄知
一、拾弐俵二人扶持　同　竹内与竹
一、　三人扶持　瀬尾万太郎
一、　三人扶持　豊前守殿抱守の子　藤村久兵ェ娘二人
一、三拾人扶持　牢人在に住　松下勘兵ェ

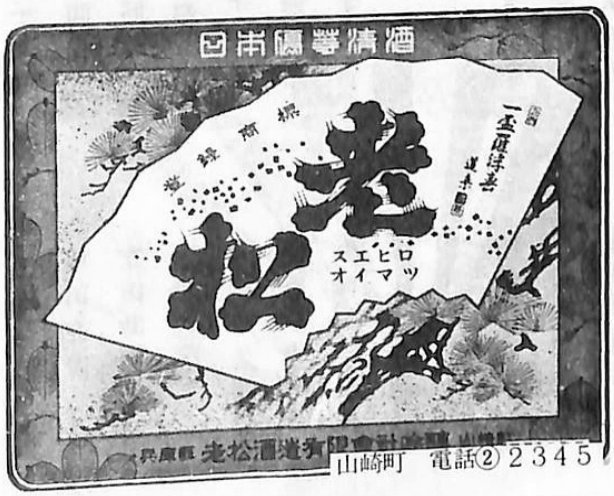
（以下次号へ）

郷土だより

○中国縦貫道開通

十月十六日、待望の中国縦貫自動車道路山崎インターチェンジが開通しまして大阪吹田から岡山落合の間が今回部分開通し阪神間との時間が大幅に短縮されます。来年度以降の見学旅行はこれを利用すればかなり遠方へ足を延ばすことができるものと期待されます。

○町制合併

二十周年

昭和三十年　旧山崎町、旧菅野村に合わせて城下、戸原、河東、神野、蔦沢、土万の六村が町村合併しことしで二十年、七月二十日を中心に記念事業が各文化団体などで行なわれました。